
異世界は以外と身近でした。

つりめねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界は以外と身近でした。

【Nコード】

N6479Z

【作者名】

つりめねこ

【あらすじ】

いつもの通りの日々を暮らす女子大学生の鈴城すずしろ 瑠依るい。

彼女は、いわゆる普通の女子大学生。「魔法やら戦争やら、それはその次元の話だよ。」

ある日、彼女は日課の古本巡りをしていた。そこにあった魔法の本、
”封穴のグリモア”。
”空白を埋める者、その名を告げよ・・・”その本に名前を書いた時から、彼女の物語は始まった。

「そう始まって、終わった。・・・はずだったんだけどなあ？」

＊基本的にノリ、で書いている時があります。初心者丸出しな小説ですが、頑張って書いていきたいと思っています。

只今、FF7の世界に突入中です。しばらくFFの世界だと思っています。

プロローグ（前書き）

はじめまして、つりめねこです。小説は初めてですが、宜しく願います。

よくある異世界トリップで、所々原作扱い、スルー、オリジナル要素等あります。

つまり、ネタバレもあります。

主観で書いている点もあるので、そこはご了承ください。
では！

プロローグ

魔法の本、”封穴のグリモア”。

本に書かれた、ある一文……。 ”空白を埋める者、その名を告げよ・

・”

その本に名前を書いた者は、物語をつづらなければならない。

日々の生活、事件、事故、会った人、話した人……。

そのすべての出来事が本に”生きた証”としてつづられる。

その本が、全部埋まったその時、”封穴のグリモア”は力を発揮する。

その力は、ある強大な災厄を塞ぐ為の力だった。

その力で、彼はその世界を救った。

役目を終えた”グリモア”は、彼の手元から姿を消した。

まるで、次の所有者を見つけるように……。

「”封穴のグリモア”……。ファンタジー小説かな？」

プロローグ（後書き）

「封穴のグリモア」

FFTA2の主人公が異世界に来たきっかけになったものです。
元の世界に戻る為に、彼は文字をつづっていきました。

この小説の主人公もそのノリで行く予定です。

〈序章〉 空白を埋めし者（前書き）

旅のきっかけの話です。ちょっと長い（細かい）かもしれません
が・・・。

あと、まったりペースで更新します。（キツパリ）

〈序章〉 空白を埋めし者

“空白を埋める者、その名を告げよ・・・”

そんなこと書いてあったらさ、名前、書きちゃうよね？・・・え？私だけ？

~~~~~

大学の講義も終わり、いつもの古本屋へ行く。

それが、私。<sup>すずしろ</sup>鈴城 <sup>るい</sup>瑠依の生活サイクルだった。

特にサークルに入っているわけでもなく、アルバイトもやっているけど、

まあ・・・そこそこ（？）稼いでいる程度という生活をしている。

そこそこのおかげで、いつも赤字ギリギリ。食費を少し削りつつ、古本屋に通っていた。

友達からは「バカじゃないの!？」と言われるが、これが私の癒しなんだからしょうがないでしょ？

そんなことを考えつつ、目的地に着く。裏路地にあるそこは、

その場所だけ時間が止まっているような、アンティークな感じ。・・・

・良く言えば。

まあ、ブッ○オフとはまた違った・・・、雰囲気とか、お宝があり  
そんな感じが良い。

特に掘り出し物なんかあったりすると・・・、やめられない。ほら、  
これとか。

「“封穴のグリモア”・・・ファンタジー小説かな？」

見た目の感じでびびっときた。これを買おう。直感って大切、うん。

「すみません、これ下さい。」

・・・300円。さて、これはアタリかハズレか。



~~~~~  
「ただいま」

暗い部屋で、元気良く言う。

1人暮らしを始めた頃は、何か恥ずかしい気持ちになったこともあったなあ。

適当に鞆を置き、癒しの読書タイム。

内容はやはりファンタジーものだった。少年が異世界を旅した物語。所々かすれているため、肝心の少年の名前が分からないのが残念だった。

「ん？・・・この少年の物語は終わったのに、まだいっぱいページがある」

ペラペラと何枚かめくるが、何も書かれていないまっさらなページしかない。

むー、ハズレだったか？と思いつつ、しばらくページをめくる。すると、あるページにこんな一文が書れていた。

「空白を埋める者よ、その名を告げよ・・・」・ね。新しいタイプの小説だなあ。面白い、書いてみるか！」

“その名は鈴城 瑠依” っと

~~~~~  
書いたらビックリ、そこは異世界でした。というオチ。

目の前に怪物（ウシみたい）なのがいるし、助けてくれた人（？）も人間じゃなかった。

ともかくお礼を言って、事情を話した。要約すると、私は異世界から来たみたいだ、と。

「ありえない」とか言われそうだったのに、何故かすんなりと受け入れてくれた。

“前例があるから”・・・なんだそれ？

私は助けてくれた人物―シドに様々なことを教えてもらった。

この世界、イヴァリースのこと、魔法・剣の世界。

モンスターのこと、そして人間以外の種族がいる、ということ。

そして、その“本”を知っている、ということ。

その後、“乗りかかった船”とかでシドがリーダーを務めているガリー克蘭という、

サークルみたいのに入れさせてもらうことが出来た。

見知らぬ土地では、仲間って本当に大切だと思ったよ、1人は寂しいし。

・・・元の世界に帰ったら友達大切にしよう。

それからしばらくは、自分の身を守る為の力、剣・魔法や体力つくり<sup>クエスト</sup>に励みつつ、仕事をこなしていた。

錬金術というのにも挑戦してみた。

ン・モウ族という種族にしか出来ないものらしいが、何故か出来た。異世界人の特権ってやつにしておこう。

あの本―、グリモア（今は手帳っぽくなっている）についてもよく知っている人にシドのつてで会うことができた。

分かったのは、

・災厄の為に作られたものだったが、今はその心配はない。

・その本は、人の生きた証を字にして、満杯になったときその力を発揮する。

その力で異世界に渡る事も可能だ、ということ。

あと、何で錬金術を使えたか、については私が“優れし者”だから、らしい。

ちなみに、能力は「縁」。うん、抽象的過ぎて分からない。

その後は、ふーんって感じで聞いていたので詳しくは覚えていない（駄目だろう）が、

とりあえず技の継承ってのだけ済ませた。同じクランにいたアデルも優れし者だったとはなあ・・・。

そんな日々を過ごして、手帳いっぱい文字が埋まり、感動のお別れ。

いざ、我が家へ！

・・・と、思ってたのに。

「次の世界も異世界だなんて聞いてない！！！」

確かに、元の世界に戻る。とは言ってなかったけどさあ！！

（序章） 空白を埋めし者（後書き）

ちよこつとメモ。

鈴城 瑠依；女子大学生の21歳。1人暮らし。

シド；ガリークランのリーダー。種族はバンガ族

面倒見がとてもよい人。

アデル；ガリークランの一員。種族はヒュム族（いわゆる人間）

自由気まま、世界でも稀な”優れし者”

優れし者；様々な種族の混血により、時たま能力の突出した人間が  
出てくる。

その能力は様々だが、普通より強いチカラを持っている  
為、

優れし者と呼ばれるようになった。

指摘・感想等ありましたら、宜しく願います。  
しかし、文にするのは難しいです；；

## 〈第一章〉 最終幻想の世界・異（前書き）

やっ和其他の世界に行けました。

〈注意！〉

＊勝手な解釈をしています。

＊DCはよく知ってないです、原作を軽くスルー・・・かも。

## 〈第一章〉 最終幻想の世界・異

「……ふう」

以上、回想という名の現実逃避でした。

「帰れると思ったんだけどなあ・・、また異世界。かあ。」

きよろきよろと辺りを見渡す。ゴツゴツとした岩がむき出しの、茶色い光景が広がる。

「・・さて、いつまでも呆けてられないね。まずは・・ファイア！」  
頭の中で呪文を思い浮かべ、手に魔力を込める。するとポツと火がついた。

——なるほど、ここは魔法が使える世界っぽい。

余談だが、魔法には2つの使用方法がある。

1つ目は、大気中に漂うマナを使った方法。

マナを束ねて、魔法を使う祭の燃料とするのだ。

2つ目は、自身の力を使う方法。

自身にマナの代わりとなる、生命エネルギーを使うのである。

余談終了。

「マナがある世界っぽいね、自分のエネルギー使っていないし。」

異世界に行ったときの注意点。

その1、あわてない

その2、目立たない（異質なことをしない）

その3、仲間を作るべし

これは、前回の異世界で学んだことだ。とりあえず、パニックになればなるほど、

周りからは白い目で見られる。ここは冷静に・・

「まずは、人を探そう」

きよろきよろと見渡しながら歩く。方角はコインで決めた。

「ん？あれは・・・剣かな？」

適当に歩いていると、茶色い地面に剣がぐっさり。

土ぼこりや汚れがその剣の年期を示している。

「何か・・・寂しい感じ。何でだろう。・・・ああ、そうか。」

岩、岩、砂、砂。

———自然が少ないんだ。

「よっし、何か明るくなれるよーに。」

人の気配・・・特に無し！

頭の中に呪文を浮かべ、魔力を溜める。そして、両手をそつと地面につける。

~~~~~

エンジンの音を大きくさせながら、俺はバイクを走らせていた。

今日はある村ー、あの事件以降に出来た村への荷物運びの仕事だった。

メテオ災厄、セフィロスの復活ー、その後も色々なことがあったが、やっと平和になった。

今だモンスターや、溢れ出たライフストリームで事件や事故が起きるが、

以前に比べたらまだマシ、だろう。

荒野を走りながら、クラウドはそう考えた。

少し高い場所で、休息を取る。

ここからミッドガルまでは、最高速度を出せば2時間あたりで着く。
・・が

ここまで来たんだ、・・寄っていくか。

その場所へ行く途中、旅人とすれ違った。

普段なら特に気にしないが、その旅人が妙に記憶に残ったのは、多
分――

「・・・・？花・・・・？」

荒れた土地にある、地面に刺さった“友”の剣^{もの}。
そこに不自然に咲く花があったからだろう。

~~~~~

剣の場所に別れを告げて、人を探す。

とりあえず、道っばいところに出てみた。商人とかいないかなー？



〈第一章〉 最終幻想の世界・異（後書き）

まだ対面させる予定は無い！（え  
周り道をしつつ、進んでいきます。

## 第二章 最終幻想の世界・縁（前書き）

クリスマス・イブ？ バイトです。本当に有難うございました。

オリジナル人物が出ます、しばらくは原作キャラは出てこない気がします。

気がするだけなので、変わる可能性もありますが・・・（えでは、どうぞ！

＊ニブルヘイムとミッドガルを勘違いしていました。

うわぁ、失敗したー！ということで、変更しています。すみません！

## 第二章 最終幻想の世界・縁

現状報告、人を見つけることが出来ました。

うん、とりあえずは・・・ね。

あれは、いわゆる襲撃されているという状態だと思うんだけど・・・

「普通、商品で闘わないよね・・・。」

~~~~~

男は自分の行いを悔いていた。あまりにも軽率だったと。

モンスターや盗賊が出現する区域だったが、武装トラックに乗っていたため

あまり危機感を持っていなかった。が、肝心のトラックが故障してしまい

動けなくなってしまった。

たいした損傷では無い。すぐに修理すれば動くだろう。

だがその時、背後には商品を狙った盗賊団がいたのだ。

「殺せ。」

冷たく呟く声に気がつけたのは、まだ俺は運がよかったのかもしれない。

ざっと見て10人程度、まだ、囲まれてはいない。

嫌な汗を掻きながら、手に持っていたスパナと大きな瓶（中身はオイル）を

大きく振りまわす。・・・が、効果はやはり、ない。

トラックの助手席には武器がある、そこまで行ければ。

男がそう考えていた時、1人の盗賊が肩から血を出しながら倒れた。はっとしてそちらを見ると、黒髪の少女がこちらを見ていた。

たった一言、「手伝います。」と彼女は言った。

~~~~~

“見過ごせない”というお節介と“情報収集——!!”という気持ちがあったのもあり、

私は一目散に襲撃現場に向かった。

まず、盗賊2人（岩陰に隠れていた）を愛刀（牡丹という）で、左を刺す。

寸分の違い無く心臓を突き刺し、捻って抜き、絶命させる。

以前の私だったら失神するぐらいの血の量と感触を残しつつ、次の目標に狙いをつける。

残り10人、手には皆ナイフや剣を持っている。銃持ちはいないようだ。

襲われている男の人も、この状況に混乱はしていないようだった。ならば、大きく出てもいいかもしれない。

集団の中で一番体格のよい盗賊を、後ろから右肩から切り倒す。

襲われていた男と目が合い、「手伝います。」と自分が敵でないことを伝える。

「誰——」と叫ぶナイフ盗賊を突き飛ばし、迫り来る盗賊どもに備え陣形を取る。

イヴァリースで習得した、範囲技。

「波動撃！」

「いや、本当に助かったぜ、嬢ちゃん。俺はラクルス。商品の運び屋だ。」

「いえいえ、私はルイ・スズシロです。・・・旅人です。」

男の人は“ラクルス”というらしい。褐色の肌にムキムキの筋肉。豪快そうな人だった。

「旅人か、腕っぷしが強いのも納得だな。」そう言ってラクルスは横目をやる。

ラクルスの隣には、アクセサリー（ネックレス）とマテリアが置いてある。

これは、盗賊から貰ったもの（奪ったもの？）だ。

ルイは盗賊を1人だけ残し、後は全滅させた。

盗賊団が奪ってきた物を全部出させてから逃がした。その戦利品だ。「おかげで商品も無事だし、なにより命が助かったぜ。気持ちだ、受け取ってくれ」

そういつてマテリアを差し出す、青いそれは光を浴びてキラキラしている。

ルイにはマテリアが何か分かっていない。が、とりあえず貰っておくことにした。

「えっと、有難うございます。大切にします。あ、あの」

ルイは一番聞きたかった情報を聞き出す為、会話を続ける。

「商品運んでいるってことは、近くに街があるってことですか？」

「ああ、ミッドガルがあるぜ。ここからだ・・・、徒歩だちっと掛かるが」

「ミッドガル！・・・良かった、方角あっていたんだ。」

「ルイさん、あんたミッドガルに行く予定だったのか？」

「ええ、途中道に迷ってしまって……。うろうろしていたんですよ」

「そうだったのか、ここは目印が少ないからな……」

「確かに……。あの良かったらミッドガルまでの道を教えてくれませんか？」

「ああ、いいぜ。つっても、基本的に道なりに行けばなんとかなるがな」

~~~~~

ラクルスさんは、ミッドガルまでの道のりを書いた地図、そして何と！

紹介状まで書いてくれました！

旅人にとつてありがたい物ですよ……。有難うございますっ！

旅人なら路銀を稼ぐのに重宝するだろう、ということで貰った紹介状は、

ラクルスさんが入っている組合みたいなもの、(WROと言うらしい)で

仕事貰える紹介状だった。本当に有難い！

あと、この青い宝石・マテリアって言っていたけど、何だろう。あとでさりげなく聞こう。

さて、先ほどの会話で、

1、ミッドガルという街がある。そこまでは徒歩では遠い。

2、目印が少ない。その街近くに村や集落は無い。

と、いうことが分かった。武装トラックで移動する辺り、あまりこの世界の人は

外に出ないのかもしれない。

と、いうことが分かった。

もちろんミッドガル、という場所をルイは知らない。が、あえて知っているようにした。

“相手の常識に合わせて話す。”知らないことは、後で調べる。感の良い人には不審に思われるが・・・、その時は正直に話す。結局、他人なので深くつつこまれることは少ないのだ。

「ミッドガル・・・か、どんな街なんだろう？トラックがある辺り、ちよつと故郷っぽいけど・・・。」

ちなみに故郷とは、元の世界、日本のことである。日本ではトラックやバイク・車は当たり前前に闊歩している。が、異世界だとやはり事情は違うらしい。

「イヴァリースは故郷より進んでたっぽいなあ。でも、やっぱり！」
「チョコボが一番だ！」とガッツポーズを構えた横をバイクが通りすぎる。

「・・・チョコボ？」

これが、彼の第一印象だったということは、口が裂けても言えないだろう。

第二章 最終幻想の世界・縁（後書き）

ちよこつとメモ。

鈴城 瑠依↓ルイ・スズシロ。

武器；刀 牡丹 黒塗りの刀。牡丹の絵が彫ってある。

技；波動撃 剣や刀・拳等の衝撃波を自分中心に放つ技。

ラクルス；商品の運搬屋。豪快な印象を持たせる。

第三章 最終幻想の世界・旅人（前書き）

メリー・クリスマス。

イブの方が盛り上がるのは何故でしょうかね。

FF7のモンスターは攻略サイトの情報で勝手に造ってます。

そのモンスターそんな外見じゃないよっ！とか

そんなモンスターでないしっとかあるとは思いますが、
生暖かい目で見逃してください・・・。

第三章　最終幻想の世界・旅人

襲い掛かるモンスターを蹴り飛ばし、魔法の詠唱をする。
蹴り飛ばしたモンスターが体制を立て直し、またこちらへ飛びかかってくる、

ルイは、魔法を刀に注ぐ。一瞬だけ、刀身が青く光る。

「奥義・凍滅」

身を切るような冷氣と、鋭い切っ先がモンスターを襲った。

~~~~~

ミッドガルまで行く途中、何度かモンスターや盗賊に襲われた。

犬（ウルフ、とする）や蛙（紫色だった、気持ち悪い）なら、皮やツメ等を切り取り、

錬金術をかける。世界が違うので上手いかないことがあると思います、まずは成分から調べようと思ったのと、お金に換える。

盗賊は、適当にあしらって戦利品を貰う。

この前みたいに全滅させてもいいのだが、特に理由がない（襲われていない）ので

ある程度、怖い思いをさせて逃がした。もちろん貰うものは貰って。

そのおかげか、持ち運び用の袋は一杯になった。

物々交換ぐらいは出来るだろうか、とルイは考えた。

~~~~~  
“元・魔晄都市”のミッドガルでは、あらゆる人がいた。

ある者は、自身の家族の為に日々を一生懸命働いていた。

ある者は、一生懸命に働く人の為に温かいスープを提供していた。

ある者は、一生懸命働いた人から金銭を奪っていた。

ほぼ毎日同じような日々が続きながらも、人々は生きていた。

しかし、その同じような日々にも変化が生じてきた。

懸命に働いていた者は人を指導する立場になった。

スープを提供していた者は「もっと世界の人々に支援の和を」という理想を掲げ、

大きな組織を作った。

盗みを働いていた者は金銭だけでなく人の命も奪うようになった。

その枠に囚われない者も存在してきた。——旅人の存在である。

彼らは、一箇所に留まらない。そのため戸籍を持たない。

移民とも違い、商人のように外に出て、その商人よりも自由に行動する。

働いたり、提供したり、奪ったりと様々な事が出来る存在である。

彼らは時に感謝され、時に恨まれる存在であったが、多くの者たちの憧れではあった。

が現実^{じふじふ}は厳しく、志^{しん}どころより実力や行動力、さらには運といったものが重なり、憧れは“憧れ”の存在のまま。という人は多いゆえに、元々ミッドガルに住んでいる人にとって、外を知っている旅人を

もてなすことは一種の自慢でもある。そして宿屋や料理店が出てき

た。

また、他所では旅人に仕事を紹介する専門店も出来たようだ。仕事に関してはWROも仕事を提供しているが、あれはどちらかというとボランティアに近い。

また、内容はピンからキリまで。もちろん報酬は高い方が良いだろうが、

信用が足りない旅人に回される仕事は少ないだろう。

それでも、旅人が必要とされているのは、やはりあらゆるスキルを持っているからだろう。

そんな旅人に憧れていた男、アルドラ・キラエスは今日も人があまり来ない宿屋で、

今日も仕事をサボっていた。

旅人以外に宿屋に泊まる人は、近くに職場があるから、とか家が無いからとかそういう理由が多い。その為何ヶ月も泊まっているお客もいる。

つまり、同じような人が同じような事をしている。ゆえに仕事内容も変わらない。

実に、刺激も何も無く・・・暇、である。

しかしそこに、短い黒髪を一つに縛った、少女がやってきた。滅多に来ない異質に、アルドラは慌てて仕事に戻る。

「——い、いらっしやいませ、宿屋『冒険王』にようこそ。」

「カードが無い・・・?ということは旅人さんですかっ!？」
警官の格好をした女性の、響き渡るような声にルイは驚く。
その原因は、少し時間をさかのぼることになる。

ガランとした雰囲気を漂わせる荒野と、目の前にはどおんという効果音が聞こえそうな門がある。

機械の声で“カードを提示しろ”と言われ困り、
面倒・・・と思いつつ、近くにいた人に話しかけたらこうなった。かなり面倒なヨカン。

「・・・もしかして旅人は街に入っては駄目なのですか？」

「あ、すみません。つい興奮してしまって・・・。いえいえ、大歓迎です。」

どうぞ、こちらのカードをお使いください。街から出る時や入る時に必要なだけでなく、このカードで街のあらゆる機関や仕事に必要なになりますので失くさないでくださいね。」

女警官から貰ったカードは、青いものに赤の線が一本入ったものだった。

どっかの銀行のカードみたいだ、とルイは思う。

「ありがとうございます。」あ、あのっ」・・・何ですか？」

急にもぞもぞとし始めた女警官に、警戒を一応する。

「……握手させてくれませんか？一度だけ！お願いします!!」

……旅人である、とは言わない方が良さそうだ。

その後、商店街（というより市場みたいだ）を周り、物々交換をした。

ウルフ（犬）のツメや蛙の皮は数があったので、そこそこの値段で売れた。

「300ギルです。」まさか、ここでもギルという通貨を聞くとは思わなかった。

合計1000ギル。マテリア宝石を売れば……も思ったがなんとなく、辞めた。

安い宿屋なら何とか一泊は出来そうだ。

地理なんか分からないので、適当に歩いて宿屋を探す。

「『冒険王』ね、ここにしようかな」

宿屋に入ると、同い年ぐらいの青年がいた。

「すみません、宿泊したいのですが……一泊おいくらですか？」

「宿泊ですね、えっと・・・一泊200ギルです。」

・・・安いのだろうか、高いのだろうか。それすら分からない。
うーん・・・と考えていると、料金に悩んでいると思ったのか、青年が慌てながら

「・・・ですが！1週間単位のご宿泊をされるのであれば、さらに安く！900ギルで

ご提供できます。いかがですか？」と言った。

500ギルのお得。魅力的な金額だった。少しボ・・・古風だが、まあ、いいか。

「じゃあ、とりあえず1週間をお願いします。」

かなり寒くなったサイフを見て、明日やることを考える。

まず、お金と仕事をなんとかしよう。WROの紹介状を持っているから、そういう機関にいけば、なんとかなるかもしれない。

あと、情報収集。物々交換の祭に、お金じゃなくマテリアじゃ駄目か、と宝石を出されたのだ。宝石が何なのか分からなかったので、断ったのだ。

このマテリアはただの宝石じゃないらしい。

ラクルスさんがわざわざくれたぐらいだから、何か旅人に役に立つ物なのかもしれない。

知っておく必要はありそうだ。

あまり広くないが、妙に落ち着く狭さの部屋でルイは朝まで眠った。

ちなみに、朝起きたら床に落ちてた。

うーん・・・、あいかわらず癖は治らないようだ。

第三章 最終幻想の世界・旅人（後書き）

ちょこつとメモ。

技；奥儀・凍滅 氷の剣で連続攻撃し、さらに「スロウ」をひきおこす技。

氷の魔法が必要。

アルドラ・キラエス；旅人に憧れていた宿屋の店主。25歳。

見た目は若く見える。

アドバイス、感想は随時求めています（。・ω・）ノ

〔第四章〕 最終幻想の世界・前兆（前書き）

一つの世界の話が終わるのにかなり時間が掛かりそう。
と、思いつつ話が膨らんでいきます（笑）

ちなみに、このFF7は、AC後のつもりですが、あくまで”つもり”なので、若干違います。

どのくらいの文字数が読みやすいのか、いつも悩みつつ書いています。

・・・短いですかね？

第四章　最終幻想の世界・前兆

ミッドガルの朝は、清々しい朝というよりかは騒々しい朝になることが多い。

魔晄エネルギーから石油エネルギーに代わり、ボイラーが朝早くから動いているのだ。

その音が合図かのように、一斉に人が動き出し始める。

寝た時より幾分か低い目線で目が覚める。

どうもベットから転げ落ちる癖は抜けないらしい。

背中に少し痛みを感じながら、ルイは体を起こす。ボォーと、けたたましい音が鳴った。

屋台で買ったホットドッグ（に、近いもの）を食べつつ、教えてもらったWROへ行く。

宿屋の店主によれば、WROはこの街の経済・流通といった政策から、食堂・ボランティア活動等の幅広い事業を展開しているらしい。比較的簡単な仕事も提供しているらしい。

簡単な仕事なら異世界人の私でも出来るかもしれない。

~~~~~

“アドミックスザーを2つ集める”

この世界での仕事は、まず物探しから始まった。

スーパードカスタムというモンスター（機械？）から、取れるらしい。

そのモンスターは、機械のような体でお目当ての物はその一部みただい。

が、最近は何っきり数を減らしたらしく、倒してゲット！というより動かなくなった機械から回収する、に近い気がする。

ルイはスパナを手に最後のアドミックシザーを取りつつ、そんな感想を持った。

これで報酬300ギル。見つけるのが難しいぐらいで、後の作業は簡単だったなあ。

「1つ・2つ。確かに受け取りました。こちらが報酬です、有難うございました。」

ぺこり、と事務係っぽい女性が頭を下げた。オッドアイが印象的な女性だった。

その後、あるモンスターの体液の採取（何かの燃料になるらしい）や、「ちよつとそこまでこの荷物運んでよ！」みたいな仕事を沢山した。

合計1200ギルの稼ぎ。それを元手に、装備を新調することにした。

~~~~~

商店街っぽい所につき、ルイはまず「マテリアあります」という看板がある雑貨店に向かった。

店内には、マテリアの他に雑誌や素材が置いてある。

“旅人を目指す貴方へ！これを知っておくべし！”といううたい文句が書かれた雑誌をルイは手に取り、読んで見る。

そこには、「今更聞けないマテリア基礎知識上・下」「絶賛！これを持てば貴方も“一流”」と書かれてあった。

ライフストリーム

「マテリアとは、魔晄が凝縮され生み出された結晶であり、古代種の知識が蓄積されているとされ、これを介すれば一般の人間でも様々な魔法や戦闘技術を使用する事ができる。自然界では天然のマ

テリアが存在するが、魔晄の豊富な土地でしか発見されず、またそのような土地が非常に少ないためこのマテリアが発見されるのは稀である。そのため一般に出回っているマテリアは魔晄炉の中などで人工的に生成されたものが殆どである。マテリアに秘められた知識や能力は多種多様で、攻撃や回復魔法、特殊な戦闘技術の付与や支援、中には強大な力を秘めた召喚獣を呼び出す物もあり、従来の兵器を遥かに超える力を持つ物が多数存在していた。中でも魔晄炉の中心で直接生成されるヒュージマテリアは通常のマテリアより巨大である分、何百倍ものエネルギーを有しており、魔晄キャノンなどの巨大兵器に用いられていた。」

ふむふむ、とコンビニの立ち読み感覚で読んでいると、店主が話しかけてきた。

「その雑誌、ちと古いから気をつけなよ。今じゃマテリアは日常品さ。私らみたいな小さい雑貨店でも置けるもんだ。ま、天然物やマスターマテリアなら話しは違うがね。」

「マスターマテリア？それってどういう物でしたっけ？」

「マスターマテリアは、マテリアの知識を最大限に持ったものさ。・例えば“ほのお”なら、一番簡単な魔法“ファイア”から上位魔法の“ファイガ”までの術が使えて、なおかつ“詠唱時間が最短のもの”さ。」

「へえー・・・、じゃあ、マスターマテリアはとても希少な物、ですね。」

「ま、育てればどれもマスターマテリアになる可能性はあるがな、じゃが、時間が掛かりすぎてのう・・・。商売にはならんよ。」

やれやれ、という風に肩を竦ませおばあちゃん店主は店の奥に消えていった。

「使い込めば、使い込む程強くなる。ってことかな？なら買って損はなさそう。」

この店にあるのは、“かいふく”“ほのお”“れいき”“いかずち”の4つの大小異なるマテリア。

ルイは一つを手にとってみた。紅い色がゆらゆらと写る。

“威力を求める方はこちらを！”というポップが貼ってある。

「メリット・デメリットが分からないや・・・。」

ルイの戦闘スタイルは、刀を使った“奥義”、そして“エアレス”という優れし者だけが使える技を中心に行っている。前者は素早さと威力が高く、後者は少々トリッキーな技（武器からエネルギーを一直線に放つ、レナート。モンスターを一時的に従えさせるラディリス等）が多いのが特徴だ。

魔法は基本的に奥義を使う時にしか使わないことが多いルイにとって、武器と相性が良いマテリアを探さなければならない。

“奥義を使う祭は、魔法を刀に宿す。”つまり・・・

「術が早く発生して、なおかつ正確なもの・・・、ついでに言うのなら、マナをあまり消費しないのがいいな。」

~~~~~

結局、あの店ではマテリアを買わなかった。

条件に合うマテリアが無かったのと、“マテリアは装着して使う”という情報をあの店主から聞いたから。

当然、私の刀にはマテリアを装着する場所？は無い。鍛冶屋とかに行けば何とかなるかな？と考えて、今、加工して貰っている最中。あと、ラクルスさんから貰ったマテリアはちょっと変わったマテリアだった。

“りだつ”というマテリアだけど、何か・・・個性？があるらしく“モンスターに使うものではない”らしいのだ。

次元を変化させて、モンスターをばいっとしてしまう魔法“デジョン”、それをモンスター以外で使う・・・物をしまったり、出した

り出来る四次元ポットみたいなもの？」と思い、鍊金釜（折りたたみ式）を出したりしまったりしてみた。これ凄く便利。大切にしよう。

カーンカーン、という音が止まった。

「出来たぜ、しかしいい刀使えものっているな。・・・ほれ」  
渡された刀には、3箇所えものの穴が開いている。

「有難う御座います。加工代はいくらですか？」

「1000ギル。というところだが・・・、一つ相談がある。」  
「？何でしょうか？」

~~~~~  
「ね、眠い・・・、体力限界だよ・・・。」

あの後、「その刀で闘う姿を見たい」と言われ、ひたすらモンスターと闘っていました。
もう・・・、何か一種の修行ですか！？という感じだった。宿屋につき、ベットにダイブする。軽く鼻を打った気がするが、眠気がそれどころじゃないくらい、凄い。

次々と襲ってくるモンスターに対し、ルイが奥義を使ったのがまずかった。

見事な技に、鍛冶屋の店主が惚れてしまい、「他の技も見せてくれっ！」と目をキラキラさせて、催促してきたのである。

だが、おかげで加工代は無料、なおかつ「これも使ってくれい！技編み出したらまた見せてくれ！」と、パースエイダーを貰った。

マシンガンとは違い、一回一回銃弾を入れて撃つタイプの物であったが、以前の世界で

“パースエイダーは、連射は出来ないかわりに、一撃が強力！クポッ！”と、銃使いのモーグリが愛用の銃を撫でながら言っていた。
乱戦には向かないが、1対1の時や防御の高いモンスターには効き

そんな代物だった。

「……故郷にあったら逮捕されそうな物ばかり持っているな、私。」

生きていく為とはいえ“普通”なら絶対触らないであろうそれらを眺めつつ、ルイは眠りについた。

夜、グリモアは一瞬光を灯し……。そして消える。

——そのページは真っ白だった。

〈第四章〉 最終幻想の世界・前兆（後書き）

ちよこつとメモ。

パースエイダー；ピースキーパーという名前の銃。一弾一弾が強力。おばあちゃんでもマテリアハウツーを知っている世界になっ
ています。

イメージとしては、コンロに火のマテリアが埋まっているような日常（え

〈第五章〉 最終幻想の世界・吉兆（前書き）

オリキャラの名前は、思いつきor適当にキーボードを打って決めます。

ですが、ゝド、ゝルという字で終わることが多いですね。
個人的に”る”の発音が好きです（聞いてない）

ティルスオブヴェスベリア

*TOVにある名前とか出てきますが、関係ありません。ですが、異世界でも、もし繋がっていたりしたら・・・。

彼女（元ネタの方）なら、異世界でも商売やってそうだな〜、思っていました。

〈第五章〉 最終幻想の世界・吉兆

その女は部下を引き連れ、ミッドガルの門をゴウゴウと音を響かせつつ潜っていた。

青く短い髪に、黒いサングラス。動きやすい、パツと見るとシーフのような格好をした彼女は………退屈していた。

“幸福の市場幹部、ノエル・アガーテ”^{ギルド・ド・マルシェ}それが彼女の肩書きである。幸福の市場は、ミッドガルだけでなく、世界でも有数の流通を司る機関である。

WROとも取引をしている。そのギルドのモットーは
“世界を繋ぐギルドであること、その為に率先して世の中に無いことをすべし”である。

このモットーに感銘を受け所属する者の半分は「お節介」、もう半分は「変人」で構成されている。

前者が主に“世界を繋ぐ”係り、後者が主に“世の中に無いことをする”係りである。

その中で彼女、ノエル・アガーテは後者の方であると周りから思われている。

幹部の多くは、本拠地で物の流れをコンピューターで分析し指示を出している。

が、ノエルの場合は「現地分析」が基本である。危険が付き纏う“現地入り”は、

基本部下に任せるのが普通なのだが、彼女は「んなの、つまらん」の一言で、部下達と同じ環境で商品の運搬をしたり、商品の流通分析をしたりしていた。

そんな“変人”のノエルは、最近目立った刺激がないことに退屈し

ていた。

「……今日の仕事は、WROに納品か。つまらないねえ。」

「あ……ノえ「姉貴と呼びな」……姉貴、そんなところいたら危ないですよ?」

「……じゃあ、安全にしたらここ私の指定席でい「気の済むまで居てくださって結構です」……ちえ。」

武装トラック、というより戦車に近いようなトラック。

そのトラックの屋根に、うつ伏せ状態でノエルはため息をついていた。

~~~~~

パンツという音の数秒後、どす黒い色のカームファング、通称“ヘルガ・ファング”が悲鳴をあげつつ地面に倒れる。硬い皮膚に覆われた額から、ドクドクと液体が流れ、液体に浸ったところの草が枯れていく。

ルイは急いで死体を布で包み、液体を採取し、皮膚を剥がす。

血は研究機関に、皮膚は防具屋に提供されるのだろう。しかし、

「本当に汚いなあ……報酬が高い訳だよ。」

岩に腰掛ながらポツリとルイは呟いた。

グリモア

朝、起床したルイは手帳がまだ真っ白なのに気がついた。

文字が埋まらなければ、元の世界に帰れない。

何故文字が埋まらないか考えたが、よく分からなかった。

とりあえず、生きる為に仕事を探し、珍しく報酬が良いのを見つけたのだが……。

これが中々面倒臭いものだった。

“ヘルガ・ファングの生態を知る為に、2・3体倒し採取する。”  
ヘルガ・ファングとは、カームファングの変異種だ。ミッドガル郊外は、土壌汚染がとても酷い。乾いたヘドロや産業廃棄物、石油から出たエネルギーのカス、排気ガス等で自然環境が大きく変わった。その警告か、最近表れたのがモンスターの突然変異種だった。  
ヘルガ・ファング、見た目は黒いだけのファングだが、その血は生物にとって猛毒、皮膚は大抵の剣では傷がつけられない、むしろ欠ける、といった代物だった。

これが、街にいないことだけが奇跡かもしれない。  
報酬は4900ギル。サイフはほくほくだが、気分はサイアクだ。

そんな状態で食欲も湧く気配が無く、WROから提供された食事をぼくつと眺めていた時、横から視線を感じた。――青髪の女性。

――彼女はこの物語のキーパーソンだったに違いない、と私は後で思っただよ。

\*\*\*\*\*

「へえ、じゃあ1人でここまで来たの？中々ワイルドじゃないの」  
「まあ、運も良かったよ。その人いなかったら、多分こうはなっていないかっただろうし。」

ルイとノエルは楽しそうにおしゃべり、という名の人生論を語っていた。

視線に気がついたルイは、ノエルに話しかけた。どうやらルイの食

事の方が美味しそうに見えたらしい。WROの食事は来た順番に種類が違ったりする（サラダのドレッシングが違う等の程度だが）ので、嫌いなモノに当たったらしいノエルは、羨ましそうに隣を見ていた、とのことだった。

ノエルはとても聞き上手で、気がついたら色々話してしまった。もちろん、自分が旅人であることも、である。（異世界の、とは言わなかったが）

それに興味を持ったらしいノエルは、自分は商人で色んな街を回っている。

知りたいことがあったら、聞いてくれ。と胸を張って言った。

言葉に甘えて色々質問をしたら、実用的な事から、かなりマニアニックなことまで教えてくれた。

ノエルは数日間ミッドガルに滞在し、その後カームという街や、アイリンシュテルという所を回り、またミッドガルへ戻ってくるらしい。

「“現地入り”かあ、ある意味ノエルも旅人みたいなもんだね、しかも商売もしててさ。凄いや」

「まあね、つってもあたしらは所詮商人さ。腕っぷしはそんなに強くない。だから用心棒やトラックに色々武器をつけたりしているのさ。」

「へえー・・・」

「なあ、ルイ。良かったら護衛の仕事、請けてくれないか？報酬も弾むぜ？何より、あたし、ルイの腕っぷし見てみたいしさ。どう？」

「ええ！？でも、うちそんなに強くないし・・・」

「なあに、1人で。とは言わないよ。馴染みの店のやつにも声はかけてあるんだ。そいつも来るから、ルイに大きな負担はかけないさ」やってくれないか？と、キラキラ光る視線を横目にルイは考える。

「——分かった、良いよ。あ、でも行く前日には声掛けてくれると嬉しいな、宿屋の手続きとかしたいし・・・」

「うっし、決まりだな!! ありがと! 楽しみになってきたぜ♪」  
ルンルンという効果音が聞こえそうな程、上機嫌なノエル。

——彼女にとってルイという旅人は、「絶好の刺激だったし、何よりあたしの勘がピンつときたからね。」という発言にもあるように、退屈しのぎでもあったのかもしれない。

## 〈第五章〉 最終幻想の世界・吉兆（後書き）

ちよこつとメモ。

ノエル・アガーテ；女商人。見た目は凜としている。中身は姉御。  
26歳ぐらい？

幸福の市場；流通を司る集団<sup>ギルド</sup>。マテリアを日常品にしたのは  
彼らのお陰でもあるといわれている。

原作キャラに会う為の一步。  
次こそは、彼らが出てきます。

〈第六章〉 最終幻想の世界・書（前書き）

先に言っておきます。

まわり道が好きなのです。（え



## 第六章　最終幻想の世界・書

ノエルの部下であり右腕である男、アロンゾ・バエルはある目的地に向かっていた。

そこは良心的な女店主と、可愛らしい子ども達が営んでいるバー&飲食店であり、

無愛想な男がやっている、運び屋兼何でも屋の事務所だ。

いつも俺はそのバーで食事を済ませつつ、無愛想な方の人物を待つのが習慣だ。

毎日は来れないが、ここの料理は食べたら忘れられない味だ。

この前は新人がお袋の味を思い出したのか、食べながら号泣していた。

“バー・セブンスヘブン”ここが目的地だ。  
カラン、と来店を知らせるベルが鳴る。

「あら、いらっしやいませ。お久しぶり、もうそんな季節なのね。」

黒髪、スタイル抜群、そして美人の店主。

そんな彼女に顔を覚えて貰えるのは、とても嬉しい。

覚えてもらう為に、来るたび同じメニューを注文し続けた俺の努力は報われた、と言ってもいいだろう。

「お久しぶりです、ティファさん。相変わらず綺麗ですね。」

「ふふっ、そんなこと言っても何も出せませんよ?」

ああ、毎日来れる男が羨ましいぜ。  
やつら

~~~~~  
毎年、この季節になると仕事を持って来る人がいる。

仕事内容は、護衛。カームや最近出来たアイリンシュテル等の街を回っている商人の護衛だった。報酬は食事付きで、170000ギル。追加で街に寄った分また報酬が増える。

いい仕事なんだけど、何週間か音信普通になるのが心配よね・・・。

セブンスヘブンの店主、ティファ・ロックハートは毎年この季節に必ず来る男に、毎年同じメニューを作っていた。

最初、クラウドはこの仕事を受ける気は無かったけど、マリンとデズレルの学費やお店のことを気にしたのか、結局受けてくれたようだった。

私がしっかりしていれば・・・。

はあ、とため息を吐く私を、心配そうに男―アロンゾが見ている。いけない、いけない。今は仕事中！

「今日はいつもより早く帰ってくると思うわ、運び屋の仕事だったし。」

「そうですか、じゃあ今のうちに・・・あ、そうそう今回はもう1人、護衛が増えるんですよ。」

「へえ、珍しいですね？」

「いきなり『護衛もう1人追加したからっ！』ってノエルさんが・・・あ、でも報酬は減らないんで安心してくださいね！」

ティファが心配そうな顔をしているのを見たアロンゾはそう言った。が、ティファは違うことを心配していた。

以前、似たような状況になった時、その人物は無愛想なクラウドに

対し、どうやら腹を立ててしまったらしく軽い乱闘騒ぎになってしまった。

クラウドは攻撃軽いなし、反撃をしなかったのだが、逆効果になってしまったらしい。

「あの、その人ってどんな人ですか？」ティファは尋ねた。

「そうですねえ・・・」

アロンゾは腕を組み答える。

~~~~~

「ノエル、その馴染みの店の人ってどんな人なの？」

「ん？ああ、そいつはね・・・」

ノエルは腕を伸ばしつつ答える。

「波乱万丈な人生送っている。マイペースで、大雑把だそうです。」

「世界を救った英雄<sup>ヒーロー</sup>。だけど無愛想で無口、プラス根暗。」

数秒後、本人達が同時にくしゃみをしたのは余談である。

~~~~~

あれから2日後、ノエルから連絡が来た。

『明日の午前中に出発するから！』という内容だった。

明日出発なら、今日は仕事じゃなく散策しよう、と思い私はブラブラ歩いていた。

目的地は・・・とある教会だ。

何回か教会が夢に出てきた、そしたら本当に教会があった。言ったら友人達は信じてくれるだろうか？と考えつつ、歩を進める。

寂れた雰囲気を出す教会^{そと}には、奥に綺麗な花々と泉がある、不思議な空間がある。

とても静かで、澄んでいて、落ち着いて、寂しい。そんなことを感じさせる場所。

こつこつ、と足音を立てつつ泉の場所へ行く。
花達を踏まないように注意し、泉を覗き込む。——吸い込まれそうだ。

——「こんにちは。」

泉の向こうの彼女は、笑顔で言った。

夢の中にいた彼女が、そこにいた。

~~~~~

『また、会ったね？私の名前、覚えてる？』  
彼女はニコツとしながらルイに問いかける。

「エア・リス？どうして、ここに？」

『ん、ここ、私のお気に入りだからかな？』

・・・ルイはさ、どうして自分が異世界を渡っているか。考えたこと、ある？』

「・・・お気に入り？それに・・・異世界の理由、エアリスは・・・知っているの？」

『知らないの、ごめんね？だけど、きっと“ココ”に来たのにも、理由があるんじゃないかな？こうして、誰かと知り合うことが出来ることも、ね？“縁”って言うのかな？』

「“縁”・・・それって・・・」

『私達も“縁”だよねっ！・・・きつとこういうことじゃない？』

「いや、さっぱり分からないよ？・・・エアリス？あれ、消えちゃうの！？」

『出会いは大切に、ってこと。』

あんま理解出来ていないのに、エアリス消えちゃったよ・・・。  
出会いを大切に・・・ね、確かに普通じゃ出来ない出会いを私は経  
験している。

良い人悪い人、いっぱい会ったけど、それを大切にしよう。

「・・・よぉーしっ！元気出てきた、頑張ろう！」

腕を空に掲げて叫ぶルイ。

———<sup>グリモア</sup>手帳は字を書き始めた。

## 〔第六章〕 最終幻想の世界・書（後書き）

ちよこつとメモ。

アロンゾ・バエル；ティファに一目惚れした男性。ノエルの部下。  
赤バンダナが特徴的。

エアリス；ルイの夢に出てきた女性。ちよつとおつちよこちよい。  
花のある泉と彼女には何か関係があるのだろうか？

次こそは、次こそは彼をつ……。↑

## 〈第七章〉 最終幻想の世界・意（前書き）

あけました。今年も頑張ります。

キャラクターの服に関しては、大きな特徴しか書いていません。と、いうのも私自身が洋服に関してうとい、からです。（えなので、洋服に関しては想像して読んで下さると嬉しいです。原作キャラは、ほぼ原作通りの格好です。

## 第七章 最終幻想の世界・意

「ただいまー!」

バー・セブンスヘブンに、元気のある声が響く。

アロンゾが振り返るとそこには2人の子どもがいた。

1人はピンクの大きなリボンをした少女。1人はショートカットの少年。

「おかえり、マリン、デンゼル。今日はどうだった？」

マリン、デンゼルと呼ばれた二人はにこやかに話し出す。

「それがね!デンゼルったら、授業中に寝てたのっ!」

「ああ!マリン!それはティファに言わないで、って言っただろ!」

デンゼルと呼ばれた少年が慌てている。これはどうやら本当の事のようにだ。

「デンゼル?ちゃんと授業中は起きていないとダメよ?」

「ほら、怒られた。マリンが言うから・・・イテ。」

ポカリ、とティファはデンゼルの頭を軽く叩く。

「デンゼルがすっかりと授業を受けていればいいのよ?・・・でも、どうして眠くなったの?」

夜更かし、はしていないわよね?」

ティファがデンゼルに問いかける。すると、マリンが今度は慌てたした。

「あのね、デンゼルったら・・・なんでもない!!・・・ん?あ、バンダナのおじさんだ!」

「おいおい、“おじさん”じゃないだろうっ!あと、俺はアロンゾだっ!」



まさか、そこで自分に触れられると思ってもしなかったアロンゾは、軽くコーヒーを噴出してしまった。

ちなみに“バンダナ”は、俺が着けている赤いバンダナのことを言っているらしい。

だからって、そんなあだ名をつけなくてもいいだろ……。

「で、おじさん。何でここに……って、もしかして仕事の依頼？」

「だから……。……ああ、“何でも屋”にいつもの仕事をな。」

「ええ、もうそんな季節？ またクラウドとしばらく会えなくなるの??」

マリンが不安げに呟く。

「マリン、仕事何だからしょうがないだろ？」

デンゼルが腕を組みながら言う。

アロンゾが何か言おうとした瞬間、けたたましいエンジン音が店に響いた。

「あ！クラウドだ！」

マリンとデンゼルが外に飛び出す。店に残ったのは俺とティファさん。

……。……まったく、心配させないように一言言おうと思ったのにな。

アロンゾは1人、心の中で愚痴っていた。

「ごめんなさい、二人ったらもう……。」

「あ、いえ。お気になさらずっ」

そんなやりとりをしているとカラン、という音と、「……。……誰だ？」という声が聞こえる。

「……。……アロンゾ、だよ……。」

まったく、ティファさんみたく、人の名前はしっかり覚えろよ!!

~~~~~  
運び屋の仕事を終わらせ帰宅すると、マリンとデンゼルが店から飛び出すのが見えた。

「「おかえり!クラウド!」」

「・・・ただいま。マリン、デンゼル。」と言うと、二人が駆け寄ってきた。

右にマリン、左にデンゼルという状態。

・・・動けない、困ったな。

クラウド、という青年はしばらくの間、その場所に突っ立っていたという。

マリンとデンゼルのマシンガン並みの話しに、相槌を打ちながら店（兼、事務所）に入る。

カラン、という音の先に赤いバンダナの人物が見えた。

「・・・誰だ?」

「・・・アロンゾ、だよ・・・」

がつくり、と男がうなだれた。・・・ああ、あの

「バンダナ、か。」

「またバンダナ!? またそのネタか!? ...って、もういいや!

“何でも屋”に仕事の依頼をしに来たんだ。いつもの護衛だ。報酬もいつもの通りだ。」

「・・・そうか、いつ出発なんだ?」

「明日だ。急だが大丈夫そうか?」

「・・・大丈夫だ。場所も前と同じか?」

「ああ、そうだ。」

相変わらず、急だな。と思いつつクラウドは依頼を引き受けた。
正直、文句を言っても伝わるような相手がいないのを知っているからだ。

面倒なことに、なりたくはない。

「クラウド！」

「……？……マリンか？」

夜、俺の元に、マリンがやってきた。

「これ、お守りに！デンゼルと一緒に作ったの」

“お守り”というそれは、小さな袋だった。

俺が受け取ると、マリンは「あまり上手くは作れなかったけど」と言った。

「袋の中に何か入っているのか？」

「あ、見ちゃダメ！おまじないが消えちゃうから！」

袋の中身を見ようとした俺をマリンが止めた。

……“おまじない”は何か分からないが、願掛けのようなものだろうか？

「分かった、見ないようにする。マリン、有難う。デンゼルにも伝えてくれ。」

わしわし、とマリンの頭を撫でると、えへへ、という声が聞こえる。

「もう夜も遅い、ちゃんと寝たほうがいい。……学校もあるだろう？」

「うん、分かった。クラウド、おやすみなさい。」

トタトタ、と足音がして消えていく。

と、同時に人の気配がした。「……デンゼルか？」

デンゼルが柱の影から出てくる。

「・・・何で分かるんだよお、クラウド。」

「・・・カン、だな。」「カンって・・・」

軽くうなだれつつ、デンゼルは真っ直ぐ俺を見る。

「クラウド、俺さ・・・バンダナのおっさんに頼んで武器、選んで貰っているんだ。」

まだ、予定だけど・・・とデンゼルは心の中で思った。

本当はすぐにそうして貰いたかったが、アロンゾが了承してくれなかった。

理由が分からない。何故、武器が必要なのか。と問い詰められた。

デンゼルとマリンは、学校と呼ばれるWROが作った勉強会に参加している。

ティファが苦勞して参加できるようにしてくれた学校だが、習っていることは算数やら科学やら、“今”の状況に役に立ちそうも無い、とデンゼルは感じていた。

“将来の為に”と言われるが、“今”ティファは毎日苦勞して働いているし、クラウドも仕事をしている。

ティファの店で、マリンのように上手く店を手伝うことも出来ない

(料理もイマイチ)

デンゼルは、どうしたらこの自分を、この状況を変えられるか悩んでいた。

そんな時だ。WROの学校からの帰宅の祭、短い黒髪の少女を見たのは。

まだ、そんなに自分とも変わらない(ように見える)少女は、依頼募集窓口、

通称“広場”で、仕事を請けていた。広場で仕事を請けるのは、“旅人”だけだ。

これだ、とデンゼルは思った。旅人は様々な仕事を請けることが出

来る。

その仕事の報酬を貰えばティファ達の負担が軽くなる。

“旅人になりたい”その想いが強くなっていった。

旅人になる為にはまず、ある程度自身を守る力が無ければならぬ。

その為に、まずは闘えるように毎日。夜遅くまで特訓をしていたのだ。

「・・・俺、旅人になりたいんだ。」

“クラウドみたいに、世界を回って仕事して、報酬貰って、皆を助けたい。守りたい”

デンゼルの決意は固かった。

「・・・デンゼル」

クラウドが怒っているような、悲しんでいるような眼で俺を見ていた。

「俺は、デンゼル達には楽しい思い出を作って欲しい、と思っている。

・・・“あの時”とはもう違う、平和な世界になった、と俺は思っている。

だからこそ、デンゼル達には俺が出来なかった、色んな事をして欲しい、と。」

クラウドはそこまで言って、少し優しい眼になった。

「・・・だから俺は、“デンゼルがやりたいこと”が楽しい思い出になるのなら、

・・・俺は反対しない。」

「クラウド・・・」

反対される、と思っていた俺は、正直驚いた。

“危ないから辞めろ”といわれると思っていた。

少し、間を置いてクラウドは俺に言った。

「・・・一つ、言っておく。」

武器を持つ、ということは命を奪うことの責任を持たないといけない。

「・・・誰でも傷つけることが出来る。それが、大切なひとでも、だ。デンゼル、お前はその責任をしっかりと持てるか？」

「・・・」

「もし、その責任をしっかりと持てたのなら・・・俺の出来ることをして、

お前の“やりたいこと”を助けよう。」

そう言ってクラウドは、今日は遅いからまたな、と言って話を終わらせた。

“責任”か・・・俺は、しばらく考え込んだ。

次の日の朝、クラウドが例の仕事に行った後、俺宛に手紙が届いた。WROからの手紙で、中身は2泊3日の“外”でのキャンプのようなもの。

もちろん“外”には魔物がいる、盗賊もいる。一応はWROの護衛もいるが、絶対安全とは言えない。でも、それを上回る魅力が“外”にはある。

クラウドの言う“責任”をちゃんと持てるか分からない、がそれを含めてやってみたい。とデンゼルは思った。

予定日は2ヵ月後。その間までに、色々と準備をしないと！

そう考えると同時に、デンゼルは言いような無い高揚感を感じた。

「俺、やってみるよ。・・・とその前にティファにも言わないとな・・・。」

ティファのゲンコツを貰うかも・・・と考えたデンゼルは、最終難関であろうティファに

どうやって説得をしたらよいか。デンゼルはまた、頭を悩ませるこ

となる。

〔第七章〕 最終幻想の世界・意（後書き）

ちょこつとメモ。

ティファ・ロックハート

セブンスヘブンという、美味しいカクテルと家庭的な料理が人気の店の店主。

見た目とは裏腹に、かなりの拳法使いらしい・・・？

現在はマリン・デンゼル、クラウドと生活をしている。

クラウド・ストライフ

ティファの店の場所を借りて、何でも屋と運び屋の仕事を受けている。

仕事の受容が多い為、店に帰ってこないこともしばしば。

ティファとは幼馴染であり、大切な人。

だが、恋人というわけではないらしい。

マリン

ティファ達と一緒に暮らしている少女。

将来はティファの店と一緒に切り盛りしたいと思っている。

デンゼル

ティファ達と一緒に暮らしている少年。

マリンと一緒に学校に通っていたが、最近悩みがあった。

クラウドに対して憧れが強い。

今回は原作キャラサイドです。

デンゼルの言う”旅人”は、何でも出来る人、に近いです。

デンゼルは、親を失い、育て親も失い、病気にかかり。ある意味壮絶ですよ。

クラウドも壮絶・・・というよりも、FF7の住人は皆そんな感じですね。

次回はやつとルイとクラウドが会う、ハズ。(え

第八章　最終幻想の世界・出会い（前書き）

宣言、チョコボとモーグリの可愛さは鉄壁。

実際に私は鳥、好きです。鷺^{わし}とか鷹^{たか}とか梟^{ふくろう}とか。もふもふしたいです。

そんな発言は置いて、今回はようやく出会います。次の世界までの道のりは長いなあ・・・。（え

第八章 最終幻想の世界・出会い

武器よし、マテリアよし、携帯食料に・・・。

ごそごそ、という音を立てながらテキパキと準備をしていく。

これから何週間か護衛の仕事をする、忘れ物は一大事だ。

「よし、これでオツケーかな？・・・あ、あと手帳はグリモアはつと・・・」

ばんばん、とその存在を確認する。この旅で二番目に失くしてはいけないものだ。

トントン、と階段を下りると「よお、ルイ！」「あ、ルイさん！今日、飲み会するんすよ！」

と、この住人達が声を掛けてきた。

「おはようー。」ルイも挨拶を交わす。

「悪いけど、今日から何週間か仕事でさ。外に行つて来るんだよ」

“仕事の為に何週間か空けます”とフロントにある名簿にメッセーヂを書く。

これで、帰ってきたら寝るところが無い！ということは無くなるだろう。

「外か・・・ずいぶんと懐かしい響きじゃ。」

住人の中で“長老”というあだ名がつく老人がつぶやく。

「あ、長老！おはようございます。長老は外に行ったことがあるのですか？」

「昔、にな。若い頃、兵士として外に出てたのじゃ。まあ、補給部隊だったかの」

ほほっと笑う老人。

「ルイや、気をつけて行くのじゃぞ。・・・そして、自分を大切に、の。」

そう言う老人は、懐から黄色のマテリアを取り出した。

「昔使っていたモノじゃが・・・まあ、無いよりはマシじゃろ。持っていていけ」

「わぁ！有難う御座います！いかずちのマテリアですね。大切にします。」

黄色く光るそれは、手のひらより少し小さいサイズのモノだった。これでルイは2つ目のマテリアを所持することになった。因みにこれは刀に装着することにした。

「では、行ってきます！」
ルイの声が宿に響いた。

~~~~~

「おーい！こっちこっち！！」とノエルの声が響く。  
横にいるのは・・・ノエルの部下の人かな？1、2、・・・4人。

「うっし、おいお前ら、この子があたしがスカウトした子だ。名前  
は・・・」

「初めまして、ルイ・スズシロです。宜しく願います。」  
よろしくなー！という声があちらこちらから聴こえる。  
良かった、結構フレンドリーな感じだ。

ほっとしていると、何かのエンジン音が近づいてきた。

「お、来たな・・・紹介するぜ、ルイ。コイツが前に言ってたやつだ。」

・・・おい、クラウド。アロンゾが言ってたやつはこの子だ。」  
「あ、初めまして、ルイ・スズシロです。宜しく願います。」

挨拶をすると、クラウドと呼ばれた男の人は怪訝そうな顔をして（るように見える）

「・・・新しい部下、か？」とノエルに言った。

「へ？・・・」

部下になった覚えは無いけど・・・とルイが考えていると、直後隣からノエルの叫び声が響いた。・・・言い忘れ、らしい。しばし、ぼーっとノエルとアロンゾの喧嘩（一方的な感じに見えるけど）を見ていると、上から視線を感じた。

・・・背、高いなあ。（私は160ってない・・・）  
いいなあ、綺麗な金髪。とか、外国人みたいだ、とか思っていると、

「・・・クラウド・ストライフだ。運び屋と何でも屋をやっている。」

「何でも屋・・・へえ、凄いなあ・・・」

「・・・凄く、はないな。」

「！」（しまった、心の声が・・・）

わたわた、とルイがしていると「行くぞ、お前らあ！」という声が聴こえた。

「えっと改めて、宜しくお願いします。クラウドさん」

「・・・ああ。」

バイクを轢いて歩いていくクラウドさん。——ん・・・？

「どこかで見たような・・・どこだっけ？」

~~~~~  
集合場所に行くと、以前見かけた人物がいた。

短い黒髪の少女。見た目の歳は、俺よりも若く見える。

危険な外にいたことが不思議だ。

クラウドがそんなことを考えていると、女幹部のノエルが話し出した。

ルイ・スズシロ、というらしい。・ウータイにいなそうな名前だな。さらに、どうやら仕事仲間、みたいだ。バンダナが俺に伝え忘れたらしい。

・・・・護衛の仕事、だよな。・闘えるのか？

そいつは視線に気がついたらしく、向こうも俺を観察し始めた。

・・・沈黙が、若干きつい。名前ぐらいは言っておくか。

自己紹介をしたのだが、“何でも屋”が凄いと云われたのは初めてだった。

喧嘩を終えたらしいノエルが、出発宣言している。

横には頬が赤くなっているバンダナ（アロンゾ）。・・・相変わらず過ぎる。

毎回思うが、よくこれで外を出歩けるな、と思う。

~~~~~

青い空を眺める。今日は快晴だ。

ぐいっと腕を伸ばすルイ。と、同時にトラックが大きく右に揺れる。ルイは移動手段が徒歩の為、トラックの荷台に乗せてもらっている。ちなみに前にはトラックというよりかは、戦車に近い車が走っている。

その横を黒いバイクで並走するクラウドさん。

うわぁ……。絵になるなぁ。

この世界に免許ってあるのかなぁ？と考えていると、さっそく一個目の目的地が見えてきた。

カーム、という街だ。

~~~~~

ミッドガルに比べ、カームには穏やかな時間が流れている。

高い城壁は無くなり、代わりにレンガの門が作られた。

モンスター

城壁が無くなった為、魔物対策にチョコボが育てられているのだが、このチョコボがよく脱走して搜索願が出されたりする。

チョコボを捕まえるのはとても大変で、以前はギサールの野菜が用いられていたが（まあ、それでも大変だったが）

自然環境が悪くなった為、ギサールの野菜は希少になった。

その為、現在チョコボを捕ようとするのは至難の業だ。

普通は、諦めるのだが……。

「まあてえー！捕まってるー！！」

クラウドの目の前には、チョコボとひたすら追いかけるこという、かなり強引な手法で捕まえようとしているルイの姿があった。

叫べば叫ぶだけ疲れるだろうに……。と、呆れているクラウドの隣に、

クエツと鳴く黄色いチョコボ。

……。もうしばらく掛かりそうだな、とクラウドは思った。

ノエル達が仕事をしている間に、何かやろう！と思い、私は仕事を

探していたんだ。

そこで“チョコボの搜索願”を見つけた。
場所も分かっているらしい、なのに何で皆捕まえないのだろうか？と
考えていたのだけど・・
これが、結構大変だった。

走るスピードが物凄く速いのに、体力もあるらしく追いかけている
こっちが疲れる。

飼われているものなので、傷つけるわけにもいかない。

ぜえぜえ、と疲れているルイを尻目に、2匹のチョコボは「もう終
わり？」というような視線で見てる。しかも何か楽しそう。くっそ
ー！何か悔しい！

「まあてー！！」鬼ごっこ再開だー！！

結果、惨敗。うん、趣味；読書の人張り切っちゃいけないね。
地面に寝そべっていると、視界が暗くなった。

「・・・何をしている？」

あゝ、またチョコボにバカにされたよ・・・。って

「ありゃ？」

むくつと起き上がると、そこにはチョコボ・・・ではなく、クラウド
さんがいた。

その両隣にチョコボが寄り添っている。

「・・・あ、ああ！クラウドさん！そのチョコボ捕まえて下さい！」
「・・・は？」

そう私が叫ぶとチョコボ達がまた走って逃げた。ああ、もう！

「・・・依頼、か？」

「そうなんです！って、こらー！急ブレーキ禁止ー！！」
軽やかなフットワークのチョコボ。そのスキルが欲しいですよー！

しばらくして、クエツという鳴き声の方向を見てみたら、クラウド
さんの周りで

チョコボがハミングしてた。

・・・。

「私の苦勞って一体・・・。」

どんよりした私に、クラウドさんが声を掛ける。

「チョコボを後ろから追いかけたらダメだ。余計に逃げるからな。」

「・・・もうちょっと、早く知リたかったデス・・・。」

「すまん。」

そんなやりとりの周りで、二匹のチョコボがグルグルと楽しそうに
踊っていた。

旅人メモ。チョコボは後ろから追いかけると日が暮れる。

第八章 最終幻想の世界・出会い（後書き）

ちょこつとメモ。

カーム

ミッドガルに比べ、田舎。チョコボの飼育が盛んに行われており、その為か、高い城壁を無くしても魔物が寄り付かない。ちなみに、最初にカームで育てられたチョコボの名前は”ボコ”だとか。

チョコボに乗りたいです。

自転車感覚で乗ってみたいです。

〈第九章〉 最終幻想の世界・騒（前書き）

ちよつと空いてしまいました。

学校の授業中に限って話が浮かびます。あるある！（え

＊最近、やっとユーザーページの仕様が分かってきました（遅
お気に入りに入れて下さった方がいるそうで、ポ・ポイントが
ついとるっ！！

この場をお借りして・・・。

ありがとうございます！頑張ります！（。・ω・）ノゝ

第九章　最終幻想の世界・騒

黙々とサンドイッチを食べるルイを見つつ、俺もコーヒーを飲んでいた。

あの後、報酬を貰ったルイが“手伝ってくれたお礼に食事をご馳走する”と言い

別に構わないと言った俺を軽く無視しながら、近くにあった店へと連れて行かれた。

そんなに喰うのか？と思うくらいあれこれ注文し、今に到る。

「……はあ。ご馳走様でしたっ、と。」

ぱんつと手を合わせるルイ。……儀式か？

視線に気づいたのかルイが不思議そうな顔をしている。

「……？あ、これ食べ物に対してお礼をしているんですよ。“有難う”って。」

「食べ物に対して有難う、か。……あんたにとって“それ”は普通なのか？」

「へ？……まあ、普通にやってますねえ。習慣みたいな感じです。」

「ウータイにありそうな習慣だな。あんたはウータイ出身なのか？」

「えっと……」

ルイが少し言いよどむ。……余計なことを聞いたか。

「言えないなら無理に言わなくていい。少し気になっただけだ。」

「……すみません。」

「おい、二人とも？」ノエルの声が聞こえる。

「ノエル（あいつら）の仕事は終わったようだな。」

「あ、そうみたいです。行きますか！」

“どこ出身？”とクラウドさんに聞かれた時はどうしようかと思っ
た。

以前は“前例”のおかげで理解が早かったけど、ここもそうとは限
らない。

クラウドさんにも迷惑をかけるわけもいかないし・・・。

第一、信じてもらえるかどうか分からない。

トラックに揺られ、そんなことを考える。

ぽう・・・と手帳グリモアが輝く。字を書いているようだ。

その字は、私には読めない。何語だか分からない為だ。

なので手帳グリモアを読まれても、私の素性はバレないだろう、と思ってい
る。

・・・別に隠しているつもりも無いんだけどね。

「人に信じてもらうのって、難しいからねえ。」ふう、とため息を
吐く。

次の街、アイリンシュテルは近い。

1時間ほどで着くだろう。

~~~~~

アイリンシュテルは、ごく最近に出来た街である。

比較的多くの自然が残っており、貴重な素材や食料も採れる豊かな  
場所だ。

中でもそこで採れるマテリアは純度が高く、高値で取引されている。

その為か、街はいつも売り買いにくる商人と、出稼ぎ、また旅人が  
ごった返している。

いつからか、そこに住み着く人が出てくるようになり、争いが多  
くなった。

そこであるルールが決められた。

そのルールは、“武器の持ち込みは禁止”である。

「————ルールに従わないとその街には入れない。だけど、街  
は必ずしも“安全”じゃないのさ。隠して持っていくやつらも多い。  
そこで確実に、安全に取引する為に、こうして護衛を頼む商人が多  
い。あたしらが乗ってきたトラックなら、外はまだ安全だがこの街  
じゃ無意味なのさ。あ、そうそう。ついでに正当防衛はありだ、ま  
あやり過ぎないようにな。」

ノエル話をルイは思い出していた。

今のルイの所持品は、簡単な旅道具（地図やメモ類）と何とか持込  
を了承して貰った手帳グリモアという状態だ。

もう1人の護衛のクラウドも、普段から身につけている大剣を持っ  
ていない。

だからと言って無防備かといわれるとそうでもない。

ルイはマテリアを使わなくとも魔法が使え（隠しているが）、クラ  
ウド自身も体術に精通している。

しいて言うのなら、問題なのは護衛同士がその事実を知らないこと  
である。

「あたし言ったよな？ “やり過ぎないように” ってなあ？」

効果音を付けるのならぐったり、という音が聞こえそうな風景がノ  
エルの周りに広がっていた。

その傍らには、気まずそうにしているクラウドがいた。

事の発端は、“ルールを守らない旅人”が起こした騒動である。

ナイフやマテリアを持った旅人と商人が手を組み、マテリアを強引に奪おうとしたが

そこにルイが居合わせたのだった。

当然、ルイをそのままにしておく訳にはいけないので、その二人はルイを捕まえた。

ルイはとりあえず人のいる所を避けてから、抵抗するつもりだった。ルイ自身は、着実にこの状況から抜け出す算段をしていたのだが・・・。

その二人の運が悪いのか、ルイが幸運なのか。クラウドがそこに現れたのだった。

クラウドはこの街では武器を持ってない状況のルイを、正直なところ“護衛”の仕事仲間に入れていなかった。むしろ“護衛の対象”だと考えていた。

その為、拘束されているルイを見た瞬間、無意識に“仕事”に入ってしまった。

「・・・大丈夫か？」

「大丈夫です・・・大事、になっていきますよ？」

クラウドによってあっさり撃退された二人は伸びていて、話せそうにない。

そこに、騒ぎを聞きつけたノエルがやってきた。

事の状態を理解したノエルは、面倒くさそうに言う。

「まったく・・・とりあえず、こっちはこっちの言い分を言わないといけねえ。」

ルイ、クラウド。しっかり言えよ？」

「ごめん、ノエル。」

「・・あぁ、分かった。」

ところがここで終わらない。ルイとクラウドが言った直後、氣絶していたはずの二人のうち、旅人の方がクラウドに襲い掛かってきた。

気配に気がついたクラウドが、襲ってきた旅人に対し攻撃しようとした時だった。

ばこっ、という音と同時に、ルイの右ストレートが襲ってきた旅人に見事に決まっていた。

「いい加減にしいや!!」という掛け声と共に。

見事なカウンターだ。とクラウドは感じた。

こうして、先ほどの状況が出来たというわけである。

「本当にごめんなさい、ノエル。つい……こう……イラっと？」

「“つい”、じゃないよ。ってか、そんなに強いのに何で最初に抵抗しなかったのよ？」

「……大事にならないように？」

「……すまん、あんたが闘えるとは思っていなかった。」

結局、正当防衛が認められ、ノエル達はその後仕事をしていたが、一方でルイは“反省しなさい”ということで、宿で謹慎中だった。つまり、暇であった。

|                                                                                |   |   |
|--------------------------------------------------------------------------------|---|---|
| $\left. \begin{array}{l} \} \\ \} \\ \} \end{array} \right\} \circ$<br>$\perp$ | • | ┐ |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | • | • |
|                                                                                | ん | • |
|                                                                                | が | • |
|                                                                                | ゝ | • |

ごろごろ、とベットで転がっていても、ものの数秒しか経たない。ノエル達が帰ってくるのは夕方、今は午後3時ぐらいだ。



「抜け出す?・・・いやいや、それはだm「また怒られるぞ?」う  
おう!?!」

思わず奇声を発し、さらにベットから転げ落ちてしまったルイ。

「クラウドさん、驚かせないでください!」

「・・・ノックはした。」

「聞こえなければ意味ないです!!」

「そうか。すまん。」

まったく反省していないなチクショーと思いつつ、ルイはクラウド  
の視線の先のモノに気がつく。手帳だ。<sup>グリモア</sup>さっきの衝撃で落ちたらし  
い。

「あ、それ私のです。日記みたいなものなんです。」

開いている状態の手帳<sup>それ</sup>をクラウドさんが拾った。

「・・・変わったモノだな。」そう言いつつ手帳を私に渡す。

「確かにそうですね。大切なモノ、です。有難う御座います。」

私は受け取って礼を言った。

これが無いと、“帰れない”しなあ。気をつけないと。

大事そうに手帳<sup>それ</sup>をしまうルイを、クラウドは静かに見ていた。

## 〔第九章〕 最終幻想の世界・騒（後書き）

ちょこつとメモ。

アイリンシュテル

カームから1時間程でつく街。

マテリアの他に、薬草や食材等も集まってくる、商人の街。

だんだんルイの性格が出てきました。

まあ、普通の大学生ですから。（え

## 〈第十章〉 最終幻想の世界・偶然(1) (前書き)

今回と次回は前編・後編となっています。

私も好きなあのキャラ達がですよっ！

ちなみに、あくまで私の妄想、です。

こんなじゃないよ！という方がいらしても、すみません。しか言え  
ませんので；；

## 第十章 最終幻想の世界・偶然(1)

“一月一日、教会でエアリスに会う……。”  
その文は、いったい何を意味しているのだろうか。

~~~~~  
ちよつとした騒動があつたが、その後は特に何も無く次の日にその街を出た。

今回はここからさらに、以前チョコボファームがあつた辺りに向かうことになった。

あの辺りには、幸福の市場ギルド・ド・マルシェの支部がある。

そこに立ち寄ってから、またミッドガルに戻る。ここまでが仕事だ。

ここまでは比較的順調だったが、どちらかという帰りの方が大変だ。

理由は実に簡単。

「……はあああ……」

この幹部ノエルが急激にやる気を失くす為である。

「……ルイ。ヒマ。何か面白いこと無い？」

「無いよ、ノエル。」

「即答かよ。……おい、クラウドは何か無いのー？」

「無い。」

「つまらない。非常につまらない。」

ジタバタ、と手足をばたつかせるノエル。ノエル部下達が呆れて見ている。

ちなみにここは支部にある部屋の中だ。

調査を終えたノエル達は、報告書をまとめて提出をしたのだが・・・。

いかんせん規模がでかい幸福の市場。ギルド・ド・マルシェ

それをまとめるのは、その支部達だけでは間に合わない。

その為、強制的に幹部は仕事に借り出される。

どちらかというと“変人”の部類に入るノエルにとっては苦痛の間だった。

そうになると、必然的にストレス解消モードに入る。

「よし！だったらあの場所に行くぞ！」

またか、とうな垂れるクラウドとへ？理解していないルイ。

ノエルのハイテンションに、しばらくルイ達は巻き込まれる事となった。

~~~~~

きらきらと華やかな装飾が飾られているドーム。

その華やかな装飾とは似ても似つかない叫びが聞こえる。

「いっけえええー！！」「そこだ！！」「さすがだぜー！！」

たくさん大きな歓声が聞こえるそこには、たくさんのもンスターに囲まれた人物が立っていた。

その人物の左肩には赤い宝石がついている。

その宝石を守るようにしながら、その人物、ルイはもンスターを倒していく。

倒していくたびに巨大な画面に得点が入っていく。  
得点上がるたびに、歓声は大きくなっていった。

“ショットスクウェア”

そう名づけられたそれは、ゴールドソーサーという人気のあるテーマパークにある

スピードスクウェアとバトルスクウェアを足したような競技だ。

左肩につける宝石を守りながら、次々と出てくる“敵”を倒し、時間内でどれだけポイントを稼ぐか競うゲームだ。

宝石の強度はまちまちで、ヒビが入ってしまうとすぐに砕けてしまう。

細かい粒子で出来ているので修復することも出来ない。つまりゲームオーバーだ。

ここに出てくる“敵”にはポイントが設定されていて、もちろん強い“敵”を倒せばその分ポイントが高い。

ちなみに一番ポイントが高い“敵”はヒト、である。

ここでは、モンスターの他に人も参加している。人がゲームオーバーになると、そのポイントは倒した相手に半分はいる。

もちろん時間制限があるので、モンスターを地道に倒してポイントを稼ぐやり方もある。

が、手っ取り早くポイントを稼ぐには・・・。

「スキありいいー!!」

斧を持ったゴツイ男がルイに襲い掛かる。が、ひゅっ、と音がしたかと思うと同時に

パリン、と男の宝石が砕け散った。

“奥義・カマイタチ”

つむじ風を起こし、相手を切り裂く技。遠距離技だ。

ルイはこの技を自分なりにアレンジし、風の防御壁のようにしていた。

「・・・スキはそちにアリ。っと」  
若干ドヤ顔して言ってやった。

今このゲームに参加している“ヒト”は私、クラウドさん、アロンゾ（ノエルのイタズラ）、それに今倒したゴツイ男性と、同い年っぽい女の子、髪が少し長い銃使いの男性、旅人の剣使い。など、まあ色々だ。

2チームに分かれて“予選”という形で試合を行い、最終的にポイントが高い者、2名が決勝に行く。

現在1位は、銃使い（赤マントさんと命名。）2位は私。になった所だ。

「うらああああ！」  
間髪いれずに次の“敵”が襲ってくる。

正直、宝石だけ壊すのも大変なんだよ！？と、ルイは思いつつ刀を振り、衝撃波を出す。

~~~~~  
「なんでクラウドがいんのさ。せっかくのお宝チャンスだったのにい。」

ドンドン、という音を立てながら頭にハチマキのようなものを着けた少女は・・・。

クラウドにやつあたり（っぽいこと）をしていた。

「・・・仕事だ。そういうユフィこそ、何故ここにいる？」
「決まってるでしょ！お・た・か・ら！優勝商品！！絶対ゲットす

るつもりだったのに！

なのに……。クラウドが邪魔するし……」「いや、邪魔はしていない。」

ユフィ、と呼ばれた少女と口論しているクラウド。

そこに、1人の男がやってきた。

「お！ヴィンセントは予選突破？さっすがー！」

「……。クラウドも参加していたのか？」「無視かよっ！」

「あんたもか、ヴィンセント……。優勝商品目当てか？」

「……。まあ、な。」と、チラリとユフィを見るヴィンセント。

「なるほど。そういうことか。」「ちよっと、何、今の。」

ユフィが抗議しているのを軽く無視し、ヴィンセントと呼ばれる赤いマントの男性はボードに目を向ける。

「ユフィ。お前が予選落ちしてどうする。」

「う……。いや、だってクラウドがいるとは思わなかったし……。というか！何？この歴代高得点者って！クラウド、あんた何ちゃっかりランキングに入ってるの！」

「……。毎年、強制的に参加させられれば、こうなる。」

クラウドが遠い目をして言う。ぼんやり、とノエルの顔が浮かぶ。

「く……。あ！強制的になら、優勝商品に興味ない、よねえ？」

「ユフィ。顔が悪徳商人並にあくどいぞ。」

ニタリ、という表情に近いユフィが、クラウドに言う。

「いらぬなら、貰っても良いよね！決まり！」

「……。好きにしろ。」「よっしゃー！頑張ってね、クラウド！」

ここまでユフィが欲しがる優勝商品。それが何なのか？

「その優勝商品が何なのか、ユフィは知っているのか？」

ヴィンセントが若干呆れながら言う。するとユフィは生き生きとした表情で言った。

「すっごく、珍しいモノなんだって！」

「珍しいモノ、か……。マテリアか？」

クラウドが腕を組みつつ答える。

「可能性は高いな。……。あのギルドがバックにいるからな。」

あのギルド、とは当然ノエル所属ギルドのことである。

「例の流通ギルドか？」 「え？クラウド何かしてんの？」

「……。ランキングに入る原因だ。仕事でな。」

ジリリリリ……。と音鳴る。

「あ、決勝戦だね！ま、二人とも頑張って優勝してよ！」

ユフィが二人に手を振って見送っていた。

「いつも思うのだが、ユフィはどのようにしてその手の情報を収集している？」

「……。分かん。が、少なくともユフィ自身だけではなく、私も巻き込むのだから、相当その景品を狙っているのだろうな。」

「……。あんたも大変だな。」

「……。暇つぶしにはなる。」

ヴィンセントとクラウドがそんな会話をしている一方で、ユフィは優勝商品をどうやって高く売るかを考えていた。

~~~~~

決勝戦。

ヒトは3人だった。クラウドさん、赤マントさん、私。……。残りの1者は？」

言えば、フィールドの中央で威圧感を出していた。

「グルルルル……」  
大きな2本のツノを振り回し、その巨体で敵を突き飛ばす。  
紫色の毛皮に、4つ足の……

「……ウシ？」  
見たことはあるが、名前を思い出せないルイ。  
凶暴なベヒーモスを前に、ルイは緊張感ゼロになるようなことを言っていた。

「ベヒーモスだ。」といつの間にか近くにいたクラウドがルイに言う。

「え！あのベヒーモス！？」  
ルイが驚愕の表情で叫ぶ。危険な魔物モンスターなので当然といえば当然の反応だ。

ルイはしばらくじっとベヒーモスを見ていた。  
クラウド自身も、いつもの魔物モンスターとは違う“者”に集中していると、

「……あの、美味しいステーキ肉の元は、あんななんだ……」  
「あれを喰うのか？」

隣で若干がつくり(?)して言ったルイの言葉に、クラウドは思わず突っ込み(?)を  
してしまい、気が散ってしまった。

「グルアアア！」  
と美味しい発言(?)に怒ったのか、ベヒーモスがルイの方に向かってくる。

「うわ！来た！何で？」 「あんたの言った事が気に障ったんじゃない

いか？」

ベヒーモスは、壁や岩といった障害物を破壊しながらやってくる。

「うわ……。じゃあ、私、逃げますんで！」

そういうとルイは、右方向に駆け出す。一方、クラウドは斜め前に飛び出した。

「美味しいんだけどな……。」とルイは走りつつ、手に銃を持つ。

\*\*\*\*\*

「——優勝したあなたには、豪華商品を贈呈します！」

大きな歓声が、その声を掻き消す。

その中心に立っているルイは、何とも言えない表情で受け取っていた。

結論から言うと、ルイはほぼ奇跡に近い偶然で、優勝したことになる。

ベヒーモスを取りあえず倒す、という考えにたどり着いた3人はお互いに距離を取りながら闘っていた。

が、ベヒーモスが突進してくる旅に、岩や崩れた壁から驚いて出てきた他の魔物モンスターが出て、襲ってくる。

さらに言えば、砂埃で殆ど前が見えない状況だった。

そんな中で魔物モンスターがわんさか出てくる。

ルイは、この状況で“とりあえず、敵と思ったら倒す”という殲滅作戦に近い思考の元、戦っていた。

そこで、大きな赤い目をした魔物モンスターが、ルイに襲い掛かってきたのだ。妙にタフなそれを、ルイは苦戦しながら戦っていたのだが……。ふと、頭上を見上げるとひゅるるるという音がするような岩が……。。

ごんっ、その赤目に落ちたのである。

それを食らっても倒れていないようだったので、ルイは止めに赤目に向かって銃技“ブースト”をし、倒したのだが。

お約束というか、その赤目がベヒーモスだったのだ。

ベヒーモスも決勝戦の1者だったので、左の方に赤い宝石をつけていて、それを碎かれるとゲームオーバーになる。その赤い宝石をルイは碎いたのだった。

おそらく、あの天文学的な奇跡で、岩がベヒーモスに当たって動きを止めなければ、おそらくルイは負けた（逃げる）だろう。

終了のベルが鳴り、ボードを見た人々は大きな歓声。本人はぼかん、としていたのであった。

~~~~~

「あ！ちよつとちよつと〜！」

呼び止める声が聞こえて、振り返って見るとハチマキ(?)をした女の子が私を見ていた。

「ねえねえ、その優勝商品をさ。このちょー珍しいマテリアと交換しない？」

その子が持っているマテリアを見てみる。青い色のマテリアだ。

「これはね！ただのマテリアじゃなくてね〜・・・」

つらつらと話した女の子。そんなにこれ、欲しいのかなあ？

「あの、その前に・・・あなたは誰？私は、ルイ・スズシロって言うんだけど・・・」

「あ、あたしユフィ！ユフィ・キサラギ！何を隠そう伝説のマテリアハンターだよっ」

ユフィ、というらしい彼女は、私にずいっと近寄って言う。

「ルイ、ね。単刀直入に言うけど、その優勝商品とマテリア交換しない!？」

「へ? あ、えっと・・・?」

ユフィの凄い気迫に押されていると、「やめておけ」と赤マントさんがやってきた。

「ちょ、ヴィンセント! まだ返事も貰っていない・・・」

「・・・今から参加者に何か景品が貰えるらしい。早く行かないと・・・」

「行って来ます!」

コント? と失礼なことを思いつつ、私は二人を見ていた。しばらくして、赤マントさんが私を見た。

「・・・すまない。」 「あ、いえいえ。」

簡単な会話しかしなかったけど、わざわざ謝ってくる辺りいい人なんだろうな、と私は思った。

その後、「話がちがーう!」と戻ってきたユフィに、赤マントさんがずっと小言を言っていた。

〈第十章〉 最終幻想の世界・偶然（1）（後書き）

ちょこつとメモ。

ユフィ・キサラギ

優勝商品を狙ってゲームに参加していた少女。

クラウドとは、以前一緒に旅をしていた。

明るく、少し調子がいいムードメーカー。

ヴィンセント・ヴァレンタイン

ユフィと一緒にゲームに参加していた男性。赤いマントが印象的。
ユフィにほぼ強制的に連れてこられた。

クラウドとは、ユフィと同じく旅で一緒だった。

寡黙だが、ルイ曰くいい人。

技

奥義・カマイタチ（風属性）

つむじ風を起こし、相手を切り裂く技。

風の魔法が必要。

〈第十一章〉 最終幻想の世界・偶然（2）（前書き）

クラウド目線多い注意報、ならびにキャラが分からなくなってくる
かも注意報。

あと、幻想世界何話続くのかな。というぐらいネタがある。
お気楽トリップじゃない注意報も出しておくか。

*アクセス解析なんていうものもあるんですね。
ほわ、と軽い気持ちで押して、驚きました。
そして、お気に入り数も見て、驚きました。

えっと、めっちゃ頑張ります！↑

〈第十一章〉 最終幻想の世界・偶然（2）

「旅人です。……一応、ね。」

色々な意味を含ませつつ語る。

パチパチ、と音を鳴らす焚き火の前で、ルイは静かに話した。

~~~~~

ノエルの気まぐれで、大会みたいなのに出場して、優勝しました。

……若干、運が良すぎる感じもするけど。

観客曰く、誰かの技で地面が抉れたらしい。で、その破片が飛んできた。

うん、直撃しなくて良かった良かった。

そんな事を考えながら、ルイは見張り番をしていた。

あれから、ノエルの機嫌も良くなりすぐに出発になった。

クラウドさんが何か少しやつれていた気がするけど……。

疲れたオーラを感じたので、話しかけないでおいた。うん、そういう日ってある。

そういえば、あの時貰った優勝商品の中身見ていないや。

「何かな？」

ごそごそ、と袋を開ける。すると、また小さな袋が出てきた。

「マトリョシカ？……お、何か入ってる。」

小さな袋の中には、種が入っていた。

「ん……何の種かな？……埋めたら、夜中に木がなったりして……。

……ト○ロこないかな？」



あの独特の動作を思い浮かべながら、ノエルに頼んで仕入れてくれた草花や昆虫等の図鑑を見る。これは錬金術をやる祭に、材料の事を知る事が出来るのでかなり便利なもの。

「さすがに種の状態じゃ、分からないか。」まあ、当たり前である。

そんな1人コントをしていると、前のほうに気配が。

「あ、クラウドさん。交代の時間にはまだ早いですよ?」

「そうだな。」

じゃあ、何故来たの?という突っ込み(?)を押し込み、回答を待つ。

クラウドさんは、どちらかというとあまり話す方では無い。なので、こうして話す時は少し待つことにしている。

しばらくして、クラウドさんが口を開いた。

「ルイ、あんたは旅人だったな。・・・魔法は我流で使っているのか?」

俺は、何度か魔晄に落ちたことがある。ライフストリーム

・・・あんたの魔法からは魔晄を感じない。・・・マテリアを持っているが、

使っているフリ、にしか見えない。」

ぽつりぽつり、とクラウドさんの言葉が続く。うわあ、鋭い・・・。

「マテリアを使わずに魔法が使える。・・・あんたは何者なんだ?・・・それと、“エアリス”を、何故知っている?別人かとも考えたが・・・。」

「・・・。」

少しの間、考える。クラウドさんが、答えとして何を求めているか。

「まず、何者か、という質問ですが。私は・・・。」

何者なのか、という疑問。

異世界には付き物。でもこう言うしかないと思う。

「旅人です。・・・一応、ね。」

「・・・・・・・・。」

沈黙が若干ツライ。うーん、しかも納得していないし。しょうがない。

「信じて貰えるか分かりませんが・・・・。」

話してみようか。

~~~~~

“日本という世界から、異世界を渡ってここに来た。異世界を渡る方法は知っているが、それで元の世界に戻るか、分からない。”

ルイが言ったこと。それは俺が考えていた事とは全く違う事だった。

その話しが本当なら、ルイは今までずっと知らない世界で、1人で生きていたことになる。

こんな時、ティファ達ならどういったことを言うのだろうか。

・・・俺には分からない。

「あ、でも。おかげで色々な経験できてますし。」

“日本じゃ剣とか魔法とか無いんですよー!”

と、言うルイには、“寂しい”とか“悲しい”という雰囲気を感じない。

だがこれは、そういう風に振舞っているのだけなのだろうか？

「・・・あんたの事はよく分かった。俺は、話を信じる。」

正直な所、“日本に戻れるか？”という事に関しては何と話しているか分からない。

・・・異世界に突然飛ばされた気持ちも、規模が大きすぎてよく分からない。

だが、・・・知らない場所に1人でいるのは・・・つらい、とは思う。

「・・・あんたはこの仕事が終わったら、また違う所に行くのか？」
「他の“場所”には行こうかな、とは思っています。」

場所。この世界にはまだいる、ということか。

「もし、まだこの世界にいる予定なら・・・頼みがある。
・・・旅人に憧れているやつがいる。そいつに、色々教えてやってくれないか？」

以前から考えていたことを話す。

デンゼルが本当に旅人になるかどうかは別としても、

旅人の話を聞けるのはいい経験だと思ったからだ。

あと、・・・これはお節介、というやつかもしれないが、

・・・一つぐらいは、自分の居場所があってもいい。と思う。

ルイはしばらく考えてから、

「身元不明ですよ？あと、成り行きで旅人になったようなものですし。」と言う。

「・・・この世界だけじゃなく、他の世界も見ることがある。」

「・・・そんな知識のある旅人を、俺は知らない。・・・無理か？」

この手の交渉は本当に苦手だ・・・駄目か？

そんなことを考えていると、ルイが口を開いた。

「・・・分かりました。私でよければ。」

「助かる。」

なんとかなった、か。・・・ついでだ。

「・・・後、これも前から思っていた事なんだが、・・・別に呼び捨てでいい。

口調もあんた自身のままでいい。」

「・・・。」ルイが黙る。

「・・・こんなんだよ？自分で言うのもなんだけど、かなぐり、変・・・。」

「チョコボを捕まえている時に、あんたのいう“変な所”は見ているからな。」

「いや、あれは・・・。」

「あと、あんたは表情が豊かだな。分かりやすい。」

「・・・友人にも言われた記憶が・・・。」

「あと・・・」「へ！？まだあるの！？」

がつくり、としているルイ。

傍から見ている限りでは、あんたは面白い行動ばかりしている。とまでは言わないでおこうか。

しばらくうな垂れていたルイだが、そうそう、と話題を変えた。

「そういえば、“エアリス”の事・・・何で知ってたの？」

「・・・エアリスとは、昔、旅をしていた。・・・色々な事が遭って、今はもう、いない。」

「・・・。」

「・・・あんたがベッドから転げ落ちた時に、手帳を落としただろう。」

それに、“一月一日教会でエアリスに会う。”という文が書いてあったから、少し気になった。

「・・・あの場所も、エアリスにとって大切な場所だったからな。」

「そっか・・・。」

「・・・会ったのか？」

「ん・・・。“会った”かな。・・・元気、だったよ？少なくとも、私をからかうぐらいには。」

「そうか。」

「あ、そうそう。あと・・・。」

~~~~~

あのは、デンゼルの話や旅をした時の仲間（かなりざっくりだが。）の話をした。

・・・久しぶりにあんなに話したし、聞いた気がする。

ルイが異世界人だから、というよりもルイが少し自分と似ていると思ったからだ。

俺自身もあまり・・・、というより結構、知っていて当然の事をあまり知らなかったりするが（ティファに1から野菜の事を教えられるとは思ってもみなかった。）

ルイも結構、いやかなり知らない。

なんとなく自分にもそういう経験があったから、少し親近感があったのだと思ったのだろうか。

バイクで風を切りながら、俺はそう思っていた。

——ミッドガルはもうすぐだ

## 〈第十一章〉 最終幻想の世界・偶然（2）（後書き）

私の中のエアリスは、天然だけど、鋭い？なイメージ。  
おねえさんって感じもします。

あと、サブタイトルとして”共感”というのが今回ありました。  
同じような経験をしていないと、相手の気持ちちって中々分かりませ  
んよね。

＊今回の章とは関係ないかもしれませんが。。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6479z/>

---

異世界は以外と身近でした。

2012年1月13日21時53分発行